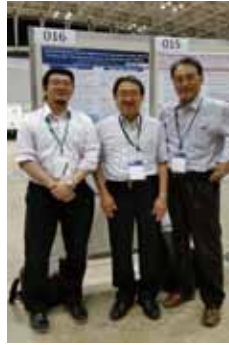


ICP2016 横浜 国際心理学会議へ参加 (学会発表)



2016年7月、パシフィック横浜にて、第31回国際心理学会議(ICP2016)が開催されました。国際学会ということで、世界各地からたくさんの方々が集まりました。私たちの研究チームからは、河合、山本、玉井が参加し、みなさまにご協力いただいた実験のうち、5歳で実施した「がまん」に関するデータを分析した結果を発表しました。

コホート研究 全体検討会の開催



三重中央医療センター(『すくすくコホート三重』)研究チーム、武庫川女子大学(『武庫川チャイルドスタディ』)研究チーム、北海道商科大学(データ分析)研究担当者が参加し、今年度の全体検討会を武庫川女子大学子ども発達科学研究センターで開催しました。

全体検討会では、皆さまにご参加いただいている研究の進捗状況の報告、データ分析状況や今後の発表予定の論文について検討が行われ、様々な意見が交わされました。

今回は、ゲストアドバイザーとしてオランダ・フリー大学スポーツ行動科学部のサフェルスバーク先生を迎え、研究の国際評価というかたちでご意見を伺いました。

武庫川チャイルドスタディ 小学4年夏休み観察レポート

今年の武庫川チャイルドスタディは、平成28年度に小学4年生になるお子さま22名を対象に、夏休み期間中に実施しました。2年ぶりにお越しいただいた武庫川女子大学の観察室では、机に向かって取り組む課題や、体を動かす課題、そして唾液調査をしました。子どもたちは、随分と身体が大きくなって、観察室がなんだか狭く感じましたし、しっかりと話を聞いてよく考えて行動をする姿が頼もしく、スタッフ一同、みなさんの大きな成長を感じる一時でした。(難波は今回お会いすることができず、大変残念に思っておりますが、ビデオを見るのを楽しみにしています!)

まず、机に向かって行う課題では、学校で毎日行う読み書きをどのようにしているのか見せてもらったり、日常生活空間がどのように広がっているのか尋ねるために地図を書いてもらったりしました。また、体を動かして行う課題では、基本的な身体活動を見せてもらうために、なわとび、ボール



*前屈は測定器を使って座った状態でいきます

投げや体力測定などを行いました。体力測定では本学健康スポーツ科学部の長岡の協力を得て、前屈・握力・幅跳びの計測を行いました。子どもたちも「(学校で)やったことある!」と得意げにやって見せてくれ、楽しんで計測に参加してくれました。前

屈は私たちが子どものころに行っていた立位前屈とは測り方が違いますので、ご覧になった方の中には時代の変化を感じられた方もいらっしゃると思います。

そして今回の調査では、唾液調査が行われました(任意)。現在3年生のグループのみみなさまには、昨年度すでにお願いましたが、お陰様で重要なデータが蓄積されつつあります。ところで今回は前年度とは少し違った方法での採取をお願いすることになりました。これは、より研究のテーマに沿ったものになるよう、また、実施していただく際のご負担を少しでも減らし、なおかつデータの精度が落ちないように検討したためです。このように、データ採取の際に誤差や間違いがでにくいような方法に工夫をこらすのも我々の重要な仕事のひとつです。実施してみても分かりにくかった点や、こういう風にしてほしいのに、ということなどがございましたら、今後の参考にいたしますので、是非お知らせいただければと思います。

*掲載を承諾していただいた方のお写真を使わせていただいています



今後の予定とお知らせ

平成29年1月~12月までの研究スケジュール

『すくすくコホート三重』では、小学6年生・5年生の3学期に、郵送による質問票調査を予定しております。ご自宅へ質問票を送らせていただきますので、よろしくお願いいたします。

また同時期に、小学5年生のみみなさんには、唾液を採取するオプション研究のご案内をいたします。こちらはオプションとなりますので、ご協力いただける方は三重中央医療センターまでお知らせください。お知らせいただいた方には、調査の詳細を後日お送りします。

小学6年生のグループの方は、中学校へ上がりましたら夏ごろに郵送によるアンケート調査を計画しています。大きく環境が変わる時期かと思えます。勉強に部活にお忙しい時期ですが、ご協力よろしくお願いいたします。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
小学6年生	郵送によるアンケート			(進級)中1へ			夏ごろに郵送によるアンケートを計画中					
小学5年生	郵送によるアンケート		唾液調査(オプション)	(進級)小6へ								

『武庫川チャイルドスタディ』では、小学4年生、3年生を対象に、3学期に郵送による質問票調査を予定しております。大学での観察は、次回、平成29年夏休みに小学4年生(現時点3年生)を対象にお越しいただけるよう計画しております。先の予定になりますので、学年が上がりましたらご案内いたします。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
小学4年生	郵送によるアンケート			(進級)小5へ								
小学3年生	郵送によるアンケート			(進級)小4へ			小学4年夏休みに観察を実施(予定)					

転居などでご住所や連絡先が変更になった方は、お手数ですが各研究グループへご連絡ください。遠方へ転居の場合も質問票のみでもご協力を継続していただけると幸いです。引き続きご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。

編集後記

今回のニュースレターでは、この一年間に実施した調査や観察、研究活動について報告させていただきました。皆さまにご参加いただく調査や観察のほかに、わたしたち研究チームが日々行うデータ整理や分析、研究活動というものはかなり多種多様でございます。そのなかでも、学会発表や検討会は重要なマイルストーンとなりますので今回報告に加えさせていただきます。

また、28年度号のコラムでは、思春期の入口を迎える年齢のお子さまの特徴をテーマとしてお話しさせていただきました。いかがでしたでしょうか?さらに充実した紙面にできればと考えておりますので、皆さまからご意見や感想もいただけますと幸いです。



【すくすくコホート三重】
〒514-1101 三重県津市久居明神町 2158-5 三重中央医療センター 臨床研究部内
TEL: 059-259-1211(代)

【武庫川チャイルドスタディ】
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46 武庫川女子大学 子ども発達科学研究センター
TEL/FAX: 0798-45-9880 Email: info@childstudy.jp

この研究は文部科学省の日本学術振興会 科学研究費補助金(課題番号 15H03453)から研究支援をいただいています。



SUKUSUKU COHORT NEWS LETTERS

すくすくコホート

平成28年度号

ニュースレター



すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ

今年も早、師走を迎え、研究にご協力いただいている小学生のみなさま、ご家族のみなさまは冬休み、クリスマスやお正月といった楽しい行事をこころ待ちにしているところではないでしょうか。このニュースレターも年の瀬の楽しみにしていただけるとうれしいです。

今年度は、研究にご協力いただいている方全員が小学校中学年～高学年になり、いよいよ思春期に入ってきました。発達心理学の世界では‘青年前期’と呼びますが、子どもたちは20歳をすぎるとの青年期を迎え始めることとなります。この頃になると、子どもたちは体格、思考や行動範囲もぐんと広がります。また、小学校での学童保育が終了して放課後の過ごし方が変わったり、お母さまの中には本格的に仕事復帰されたりすることによる環境の変化があり、保護者側としても不安に思われる面があるかもしれません。そこで、今回のコラムでは、青年前期の子どもの特徴と、それを踏まえた親と子の関係性というテーマで書いてみました。これまでのお子さまとの関係が少し変わってきたかなと思われている方のご参考になれば幸いです。

さて、三重県と兵庫県でスタートした『すくすくコホート三重』『武庫川チャイルドスタディ』は、今年も質問票調査・観察を実施しました。これから3学期に調査を行う学年も有りますが、実際に研究にご協力いただいているお子さまやご家族のみなさま、研究資金を出していただいている国や大学・病院、そしてこの研究の実働部隊である研究チームが三位一体とならなければ調査はうまく進みません。また、お子さまたちの健やかな成長のためには、学校や地域といった社会との連携もとても大切な要素です。『武庫川チャイルドスタディ』研究グループのある兵庫県西宮市の教育現場では‘こころの温度計(仮称)’というツールを導入する準備に入っています。これは、皆さまからいただいた膨大な質問票のデータを元にして、子どもの心の状態を把握するために開発されたものです。

また、今年も研究チームとしても国際学会での発表や海外からの研究者を招いての全体検討会を行い、とても実りある一年となりました。とくに、これまで長い時間をかけてご協力いただいた乳児期・幼児期のデータについては、統計学的分析によって徐々に明らかにされる部分があり、言葉や社会性の発達について3歳ころに大きな変化があることが分かってきました。調査への回答にバイアスがかかることを避けるために、協力していただいている方々への報告が遅れ気味になっておりましたが、小学校までの成果についてはようやくご報告させていただける段階にまでできております。日本の発達研究にとって新しい一ページが開かれると思っておりますので、楽しみにしててください。

検討会においては、オランダ・フリー大学のサフェルスバーク先生にこれまでの研究の評価をいただいております。これについては後ほどみなさまにもご覧いただけるよう、ホームページに掲載いたします。この研究が、国際的にも評価をいただくことにより、より大きな意味合いを持つものとなってきました。長年にわたり、みなさまとともに歩んできた研究です。長年の研究の成果として社会へも還元できるものにすべく、来年も頑張りたいと思っております。



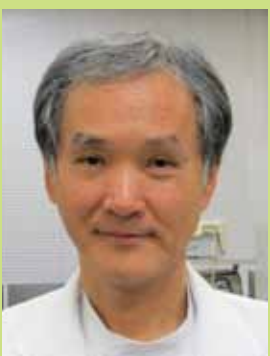
『すくすくコホート三重』から研究協力者のみなさまへ

三重中央医療センター 田中滋己

いつも『すくすくコホート三重』にご協力いただき、ありがとうございます。誕生後から続いているこの研究も早12年を超え、三重でご協力いただいている協力者様は今年小学6年生と5年生になりました。お子さま自身にご記入いただくような質問票も、今は養育者様と同等程度の量をこなしていただき‘子ども研究員’としてわたしどもと一緒に活動いただいているように感じます。現在も引き続き130名程度の方にご協力をいただいていることに改めて感謝を申し上げたいと思います。

昨年度からは三重の研究体制が少し変わり、現在は年1回の郵送による調査をメインに実施しています。また、

小学5年生3学期時点で、オプション研究として「唾液の調査」を実施しています。これはストレスがかかったときに人の体がどのような反応を示すのかを調べるためのものです。昨年の調査のようすをこのニュースレター後半で簡単に報告させていただいています。今年もこの調査にご協力いただける5年生を募っておりますので、よろしくお願いいたします。



発達段階別 子どもの発達的特徴と、親子関係の変化について

column
こんな話題を語ってみよう!



小学校中学年から高学年になると、子どもたちもいよいよ思春期の入口に立つ時期になります。発達心理学の世界では、20歳頃の自立するまでを大きくくりで‘青年期’と呼びます。そのなかでも小学校中高学年の児童は‘青年前期’と呼ばれる部分のスタート地点に立っているとと言えます。親御さんとしても、小学校へ上がってからの子どもたちの成長を目の当たりにしながら、子どもとの親子関係がこれまでとは少しちがってきたと感じることがあるかもしれません。小学校高学年くらいになると、子どもたちは体格や知識量、思考や行動範囲もぐんと広がりますし、お母さま方も環境の変化を迎えやすい時期で、小学校での学童保育が終了したり、本格的な仕事復帰をされたりといった変化が予想されます。今回は子どもの発達的特徴と、親子関係の変化について語ってみようと思います。

子どもの発達の変化がわかりやすいのは、友人関係と遊びの空間についてです。これまでの研究では、小学1年生の子どもが活動しているのは自宅を中心としておよそ1kmの範囲内であるとされています。遊ぶ場所も公園や自宅まわりで、本当の意味で親の目の届く範囲内だったと思います。小学校中学年になると、活動範囲は倍に広がります。友達の家や習い事、課外活動などの場所への移動を含めて、一気に活動範囲が広がり始めます。友人関係も広がり、学校だけでなく、クラブや地域活動で知り合った上級生などが仲間の輪の中に入ってきます。このような友人関係や活動範囲(場所・時間)の広がりの中で、このころになると、仲間関係が優先されるようになり、親との約束よりも友人との約束が大事というようなことも起こります。小学校高学年になると、活動範囲は自宅から7～8kmになり、自転車や公共交通機関などが使われるようになります。また、活動の時間は夜におよぶことも出てきます。

そうすると、親御さんとしては親の手から離れてきたという意識と同時に、親の指示が入らなくなってきたというような感覚を持つようになります。青年期に入って突然変化が訪れるわけではなく、親子関係は青年期のものに徐々に変化していつているのです。そして、「親離れと子離れ」という結構ストレスフルな関係性の変化へとつながっていきます。

この時期、教育相談などを受けていると、面白いことに、子どもよりも親御さんのほうが不安を持っていることがあります。子どもは巢立とうとするのですが、親は子どもの力を測りかねて、安全のためにと思い飛び立つのを先に延ばそうとするのです。でも、子どもは早く飛び立ちたい。ここが親子のきしみをつくるのです。

ここでポイントとなるのは、これまで親子関係の中で育まれてきた信頼関係です。ずっと以前のことになりますが、幼児期の観察場面で、お母さんが観察室から出て行くという場面がありました。覚えていらっしゃるでしょうか？あれは、お母さんがいなくなったときにお子さんがどのような行動をするのかを観るための場面でした。お母さんとの安定した関係性があると、子どもはその瞬間は不安になってもしばらくの時間耐えることができたのです。

いま親御さんは、お子さんが自分の見えないところで活動している姿を見てどのような心の動きを感じているのでしょうか？そうなのです。あのお子さんと同じなのです。これまでのお子さんとの関係性が今の安心感をつくっているのです。そして、これまでのつながりが子どもの自立を推し進めると言えるでしょう。その後、青年期後期になると親と自分が対等な関係になり、やがて成人期になると今度は老年期近くなった親のことを心配するような関係へと変わっていきます。このような関係性の変化は一生継続なのです。この研究では、可能であればそこまで見届けたいと思っています。

『すくすくコホート三重』■小学5年生対象 唾液調査 唾液調査による遺伝子のメチル化解析のおはなし

国立病院機構三重中央医療センター 田中滋己

三重中央医療センター臨床研究部では、昨年度より『すくすくコホート三重』を引き継ぐかたちで「乳幼児の個体・環境要因と児童期の社会的行動の生物学的基盤についてのコホート研究」というタイトルのもと研究を継続しています。皆さまにはこれまで長年にわたってご協力いただき、生活習慣、行動特性、社会性などの調査をさせていただいてまいりましたが、現在は研究の最終段階として、先の調査結果とお子さんのストレスとの関連について検討すべく調査を進めています。

ヒトの脳は生まれてからも思春期頃まで発達をつづけますが、発達の過程で環境や栄養等の外的要因がストレスとなって遺伝子の発現を邪魔する仕組みがあることがわかっています。これは遺伝子そのものを変えてしまうのではなく、遺伝子の設計図を読み取る時に、助けたり邪魔したりする仕組みをエピジェネティックな働きと呼ばれており、その一つにメチル化と呼ばれる現象があります。メチル化という現象は、ストレスが遺伝子に残した痕跡(こんせき)と言い換えてもいいでしょう。

最近の研究では、ヒトの脳が完成しないうちに受ける様々なストレスによって心の健康に影響を及ぼすような場合、遺伝子にメチル化と呼ばれる痕跡(こんせき)がみられることがわかってきています。しかし、長期的な子どもの発達や成育環境を調査した研究のなかでは、そのような痕跡(こんせき)についての研究は十分になされてきていません。これは、ご協力いただく方と研究チームとの信頼関係がないとできないということも障害のひとつとなっているからです。

私たちは、これまで皆さまのご協力によって、子どものころからの発達の様子を記録させていただきました。今回、お子さまの遺伝子に残った痕跡(こんせき)を調べ、これまでの発達記録やアンケート結果との関係を調べることで、ヒトが発達過程において受けるストレスと遺伝子の設計図を読み取る時に影響を与える仕組み、つまりエピジェネティックな働きについて明らかにできるのではと考えました。

具体的な調査の方法は、新たなアンケート調査とお子さまの唾液採取をお願いしています。アンケート調査の内容はこれまでにお答えいただいたものとよく似ています。また、お子さまからいただいた唾

液は、遺伝子に残った痕跡(こんせき)であるDNAメチル化の測定に用います。唾液は血液と比べると取り出せる遺伝子の量は少ないですが、採血のように痛みをとまわず簡単に取り出せる優秀な材料となります。取り出した遺伝子はメチル化のようす、すなわち遺伝子に残った痕跡(こんせき)を調べますが、これは遺伝情報の解析ではなく遺伝子操作などは一切行いませんのでご安心ください。

さて、今年調査の対象となる三重の小学5年生の皆さまには、今ご覧いただいているニュースレターとともにこの調査についてのご案内を送付させていただいています。1月中旬には、3学期のアンケート調査とともに、詳しい説明と申込書を送らせていただきます。もし調査に協力してもよいとお返事いただいた方には、三重グループから個別に唾液採取用のチューブを送らせていただきますので、チューブに唾液を採取して返信用封筒でご返送ください。昨年度は、対象者の約75%の方にご協力いただき解析を進めております。

今回の調査にご協力いただくことによって、これまでの調査結果に含まれるお子さまの育ちの中での出来事との関連について検討することができ、どのようなストレスが心の健康に影響するのか、あるいはストレスが病気に関係する遺伝子をコントロールする仕組みにどのように影響を与えるのかを解明する手掛かりが得られるものと期待しています。追加の調査となりお手数をおかけいたしますが、こちらの唾液調査にもご協力をよろしくお願いいたします。

